

## お皿の中の庭

藤井 佳奈

そのお皿は、庭のすみの方から出て来ました。じゃがいもを植えようと、地面をたがやしていたおじいちゃんが見つけたのです。

うすい緑色をした、太郎の顔くらいの大きさのお皿は、どこにでもあるようなものでした。けれどもおじいちゃんはきれいに洗い、毎日みがいしていました。

「いったいどうしちゃったんだろう」

お父さんもお母さんも心配しています。朝から晩まで畑仕事をしていたおじいちゃんが、ろくに畑に行かず、お皿をみがいばかりいるのですから。

「おじいちゃん、具合でもわるいの」

お母さんが聞いてみましたが、おじいちゃんはぎろりとお母さんをにらみました。

「どこも悪くない」

「でも、庭にあまり出ないから」

「どこも悪くない」

そう言っ、お皿をきゅつきゅとみがきま  
す。みがいたお皿は、やわらかい布で包んで、  
たんすにしまっているようでした。

何日かすると、おじいちゃんはまた庭に出  
るようになりました。けれどもじやがいもの  
代わりに、小さなみじを植えました。また  
別の日には梅、その次にはサンザシと、野菜  
ではなく、花や木を植えるようになったので  
す。そして毎日必ず、お皿をみがいていまし  
た。

「どうしたものでしょう」

「とりあえず庭に出ているし、もう少しよう  
すを見ようか」

お父さんとお母さんは、ため息をつきまし  
た。

でも太郎はちゃんとわかっていました。お  
じいちゃんは、どこも具合などわるくなかつ  
たのです。そして、お皿に何か秘密があるこ  
ともわかっていました。

「おじいちゃん、お皿見せてよ」

「だめ」

太郎には優しいおじいちゃんでしたが、お皿は見せてくれません。

「これは大切なものなんだ。まちがって割ったりしたらたいへんたいへん」

と、太郎が来るとすぐにしまっってしまうのです。

「ものすごく気をつけるから。そうだ、おじいちゃんが手に持っていてくれればいいんだよ」

「だめだ。おまえ、宿題はやったのか」  
いつもこんな感じです。

そこで太郎は、おじいちゃんがお風呂に入っている間に、そっと見てみることにしました。

夜になり、おじいちゃんがお風呂場に行きました。中からザザーとお湯をかける音が聞こえてきた時、太郎はおじいちゃんの部屋にしのびこみました。

そつと引き戸を開けて、足元を懐中電灯で照らしながら、ゆっくり歩いていきます。電気をつけるのと、お父さんやお母さんに見つかってしまいかも知れませんか。

太郎はドキドキしながら、たんすの引き出しを開けました。けれどもそこには、お皿どころか何も入っていませんでした。

他の引き出しも開けてみましたが、結局お皿を見つけないことはできませんでした。

次の日、おじいちゃんはいつものようにお皿をみがいしていました。

「おじいちゃん。お皿見せてよ」

「だめ」

おじいちゃんは、お皿を引き出しにしまいました。右の引き出し、とおじいちゃんの手元を見ていた太郎は、はっとしました。

「このたんすは、からくりたんすなのよ」

と、おばあちゃんが太郎をひざの上に乗せ、何度も見せてくれたのです。

そうだ、これはおばあちゃんのたんすだっ

た。太郎の胸は、きゅんとしました。二年ほど前、お星さまになってしまいました。今でも大好きなおばあちゃんでした。

お皿はきつと、かくれている引き出しにしまつてあるのでしよう。

おばあちゃんはどうかやっていたっけ、と太郎が考えていると、おじいちゃんは不思議そうな顔で言いました。

「お前どうした、ぼーっとして」

太郎は、ううんべつに、ともごもご言つて、部屋を出ました。

その夜、太郎はまた、おじいちゃんの部屋にそつと入りました。

お皿は、からくりたんすにあるのです。簡単に開けられないかも知れませんが、何度かやっていたらきつと開くでしょう。

けれども、右の引き出しを開けた太郎の手は、自然に動きました。

「たしかこの引き出しを半分開けて、その下にある引き出しの……」

一つずつ動かしていくと、カタリと小さな音がして、もう一つの引き出しが現れました。

太郎は鼻をふくらませて、すうつと息を吸い込み、小さな取つてを引きました。

そこには、見慣れた布がありました。

「あつた」

おそるおそる、布に包まれたものを取り上げます。この大きさと形、お皿に間違いありません。

そつとそつと、卵のうすい皮をはがすように、布を開けていくと、うす緑色のお皿が顔を出しました。

「ふうん」

お皿の表を見て、裏を見てみましたが、何のもようも文字もありません。よくみがかれているので、ぴかぴかしてきれいですが、ずつと土の中で眠っていたので、小さなキズがいっぱいあります。

なんだかつまらない、と引き出しにしまおうとした時、お皿の真ん中が、ゆらり動いた

気がしました。

「えっ」

太郎はもう一度、お皿をじっと見つめました。

するとお皿の真ん中がゆらゆらと動き、緑が濃くなったと思うと、ぱっと庭が映し出されたのです。

びっくりして声も出ない太郎の前で、庭はますますくつきりし、景色を映していききました。そして太郎は、自分がその庭に立っている気がしてきたのです。

お皿の中の景色は、歩いている時に見る景色のように、ゆっくり動いていきました。

庭の小道を進むと、左手に玄関があり、その前に大きなさるすべりが、つやつやとした肌を輝かせています。

流れるように作られた小道を、さらに進んで行くと、花の香りがしました。曲がり角に、群れて咲いている水仙です。

ああ水仙かと思った太郎は、目を丸くしま

した。水仙の香は、お皿の中からしているのです。

「わぁ」

太郎は鼻を広げ、春の香を吸い込みました。

「すごい」

さらに進んで行くと、右に桃、左に何本かのもみじが枝を広げていました。他にもたくさん、木が植えられています。しっとりした緑と土の香を、太郎は何度も吸い込みました。

石で囲んだ小さな池では、金魚がひらひらと泳いでいました。池から出ている小川のような川筋には、小さな橋がかかり、橋を守るようにあやめも咲いています。

橋を渡ると、小さな畑が現れました。手前の畑には、にんじんなどが植えられています。だが、奥の畑には、太郎が知っているようなものはありません。見たこともないような葉っぱが、不思議な香を放っていました。

その向こうには、もみじの林があり、地面は緑色のこけで、びっしりと覆われています。

た。

何てきれいな庭でしょう。次々と目の前に現れる景色を見ながら、太郎はほうつと息をつきました。

「すてきな庭だなあ」

ぐるりと庭を一周し、さるすべりの前に戻って来た時、ガラガラとお風呂場の扉が開く音がしました。

太郎は手早く、布でお皿を包みました。そして、見つけた時とほんのちよっぴりも変わらないように、気をつけて引き出しにしまいました。

自分の部屋に戻った太郎は、おじいちゃんから呼ばれやしないかと、ひやひやしていました。けれどもそれ以上に、太郎の心をどきどきさせていたのは、お皿の庭でした。

いったいどこの庭なのでしょう。たくさん木があつて、緑が濃くて。自分の家にあんな庭があつたら、どんなにいいでしょう。

太郎の家の庭も広いのですが、ほとんど畑

です。見るだけで食べられないものは植えな  
い、とおじいちゃんが決めたそうです。

うちの庭にも木をたくさん植えたら、すて  
きな庭になるのに。春は桜や桃、水仙が咲い  
て、夏はひまわりをたくさん。秋にはコスモ  
スをたくさん……。自分の庭を思い描いてい  
た太郎は、いつの間にか眠ってしまいました。

次の日も、太郎はこっそりお皿を見に行き  
ました。

昨日しのびこんだことは、ばれていないよ  
うです。お皿は布に包まれ、ちゃんと引き出  
しの中にありました。

布をめくってお皿をのぞきこむと、真ん中  
がゆらゆら動き出しました。そして今日あら  
われたのは、しやんしやんとせみの鳴き声が  
聞こえてきそうな、日差しの強い緑の庭でし  
た。

さるすべりが赤い花をつけ、金魚は日陰で  
涼んでいます。そして橋を渡っていると、あ

の独特な香がしました。

奥の畑に植わっているのが何なのか、ちやんと見て辞典で調べてみよう。太郎が目をこらして畑を見ると、女の子がいました。

中学生くらいでしょうか。ズボンをはいて、髪をおさげに編んでいます。手にシャベルを持って、せっせと土を掘り返していました。

何を植えているんだろう。けれどもすぐに、景色は畑の向こうのもみじ林に移ってしまいました。

そして昨日と同じように、さるすべりの所に戻ります。

「ああ」

もう一度回れないだろうか。そう思っていると、お風呂場から音が聞こえてきました。

太郎も毎日、お皿のことが頭からはなれなくなっていました。思い切って、おじいちゃんに聞いてみようかとも思いましたが、こっそり見ていたと知ったら、とんでもなく怒ら

れてしまおうでしょう。

おじいちゃんは今日、じんちようげを植えました。きんもくせいとぎんもくせいも植えました。どの木も、お皿の庭にあるものです。

「おじいちゃん、畑はやらないの」

太郎はおじいちゃんを手伝いながら、それとなく聞いてみました。

「太郎は畑の方がいいか」

「ぼくは、花がたくさん咲く庭もいいな。もちろん畑だってあった方がいいけど」

お皿の庭を思い浮かべながら、太郎は返事しました。

「……そうだな」

おじいちゃんは目を細めて、庭をぐるりと見回しました。家の周りに広がる地面は、今はもう畑ではなく、庭になろうとじていました。

毎日、太郎はお皿を見に行きました。

お皿の庭は、毎日季節が変わりました。桃、水仙、はこべなど、花がたくさん咲く春。緑、

にはえるあやめやしよぶ、大きなボタンや  
しやくやくの咲く初夏を過ぎると、南天やく  
ちなしが白い花をつけます。あじさいが大き  
な花をつけて梅雨が明けると、朝顔がぱつと  
まるい花を開く夏になりました。さるすべり  
が赤い花をつけ、しばらくすると、秋の花の  
季節です。きんもくせい、ぎんもくせいの良  
い香が、庭中に広がりました。

葉っぱが赤くなり黄色くなり、はらはらと  
踊りながら土におりていきました。そして空  
からひらひらと、白い雪が舞ってくるのです。

冬の間、木々は静かに呼吸し、眠りについ  
ているようでした。

どの季節もどの天気も、しつくりくる庭で  
した。そして天気の良い日はかならずと言っ  
ていいほど、少女の姿を見ることができたの  
です。少女は畑仕事をしていたり、池の金魚  
をながめていたり、みかんの木からみかんを  
もいでいたりしました。

おじいちゃんが小さなみかんの木を植えた

夜、嵐になりました。夕方振り出した雨はほとんど強くなり、たいこのように、屋根や窓をたたいています。時々ごろごろと、かみなの音も聞こえました。

太郎がお皿をのぞきこむと、お皿の庭でも雨が降っていました。今日は女の子も家にいるでしょう。

それでも太郎は、お皿の庭の散歩を始めました。こんなに雨が降っていて、雨のおいもしているのに、全然ぬれないというのは本当に不思議です。

大きな葉っぱにも、池にも、雨が足音をつけています。雨の日の植物たちは、どんな気持ちでいるのでしょうか。シャワーをあびるように気持ちがいいのでしょうか、それとも太郎のように、かみなりがきれいな木がいるかもしれません。

太郎はかみなりがきれいでした。さつきから聞こえているごろごろいう音は、どんどん近づいてきています。けれども太郎は、めず

らしく気にならず、お皿に見入っていました。

橋を渡ると、水びたしになった畑が見えま  
した。せっかく植わっている草が流れてしま  
うのではないか、とお皿をのぞきこんだ時、  
どどーんと大きなかみなりが落ちました。

「ひゃあっ」

太郎はびっくりとし、お皿をおなかに抱え込  
んで、丸くなりました。

どどーん　ぴかっ　どどーん

怒っているように、かみなりは何度も何度  
も落ちてきます。

こわい、こわいと太郎が動けずにいると、  
がらりと扉が開き、電気がぱつとつきました。

「お前、何してるんだ」

目を丸くしたおじいちゃんが、太郎を見下  
ろしていました。おじいちゃんはすぐ、太郎  
の抱えているものに気づき、手をのばしてき  
ました。

「あつ、ごめんなさい、ぼく……」

太郎は、おじいちゃんに取られたお皿を見

て、はっとしました。そして自分の足元を見ると、そこには大きな、うす緑色のかけらが落ちていたのです。

「わあ」

太郎はかけらを拾い、じっと見つめました。お皿のはじっこから真ん中まで、まるでケーキのような形のかけらです。

（どうしよう）

どなられるだろう、ぶたれるかも知れないと、太郎はぎゅっと目をつむり、かけらをおじいちゃんに差し出しました。

「……ごめんなさい」

指からすつと、かけらが抜けていきました。おそるおそる目を開けた太郎が顔を上げると、おじいちゃんはかけらを、割れたお皿に合わせせていました。

けれども所々くずれていて、ぴったり合いません。そうやって、いるうちに、かけらもぼろりとくずれ、粉々になってしまいました。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

太郎は、たたみに頭をつけるようにしてあやまりました。けれどもおじいちゃんは、何も言いません。

雨とかみなりの音だけが、聞こえていました。

「仕方ないさ」

おじいちゃんの細かい声が聞こえてきたのは、かみなりの音が、だいぶ遠くなってからでした。

「顔をあげなさい。もったいぶってお前に見せなかった私もわるかった」

「ごめんなさい、ぼく、どうしてもお皿が見たくて」

「そして一度見たら、何度も見たくなったらもう」

太郎がうなずくと、おじいちゃんは小さく笑い、ぽつりと言いました。

「この庭はすごいな」

そして一つ、大きく息をつきました。

「もう寝なさい」

「でも、ぼく」

「いいから、明日にしよう。明日ゆっくり話をしよう。」

今日はわたしも休みたい」

「……はい」

太郎は悲しくて、胸がつぶれそうでした。おじいちゃんの大事なお皿をこわしてしまったこと、なによりおじいちゃんの悲しそうな顔がつらくて、涙がぼろぼろこぼれ落ちました。

ふとんに入っても、涙は止まりません。割れてしまったお皿は、元には戻らないのです。それならば何ができるだろうと、太郎はいつしようけんめい考えました。

（明日、接着剤を持って行こう。もしかしたらそれで、庭が見られるかも知れない）

そう考えついた時、ほんの少しだけ楽になった気がしました。そしてやっと眠りにつきました。

次の日、太郎が学校から帰ると、おじいちゃん  
が庭から声をかけました。おじいちゃん  
は庭のすみに立っていて、太郎が行くとシャ  
ベルを渡しました。

「ちよつと手伝ってくれ」

「何を植えるの」

おじいちゃんはだまって、足下の袋から、  
布に包まれたものを取り出しました。見ただ  
けでお皿とわかった太郎は、叫ぶように言い  
ました。

「うめちやうの？　ねえ、接着剤でくっつけ  
たらどう、他にもいい方法があるかも知れ  
ないし」

太郎はおじいちゃんの腕を揺さぶりました  
が、おじいちゃんは首を横に振ります。

「粉々になってしまったんだ。土に返してや  
らないと」

「でも」

「その方がいいんだ」

地面には、もう穴がほってありました。お

じいちゃんは布を開いて、太郎にも見えるようにしてくらました。割れたお皿の上には、小さなかけらも乗せられています。それを見ていて、太郎の胸はまた苦しくなりました。

おじいちゃんは二回、三回と優しく、ゆっくりお皿をなでました。そしてそっと穴にお皿を置くと、シャベルで土をかけ始めました。

「お前もかけろ」

太郎もシャベルで、土をすくいました。

さく さく ぱさっ

さく さく ぱさっ

土は太郎の涙を吸い込みながら、お皿をかくしていきました。

おじいちゃんは最後に、ぱんぱんとシャベルで地面をたたきました。そして、ふうつと一息ついて、よっこいしょと立ち上がりました。

「お茶持ってきたんだ。お前そこに座れ」

おじいちゃんは、つばきの横にある庭石を指さしました。この石も、いつここに置かれ

たのでしよう。腰をおろすと、庭がぐるりと見渡せて、太郎は、おじいちゃんが魔法をかけているような気がしました。

「飲め」

おじいちゃんは太郎のとなりに座ると、まほうびんからお茶をとくとくと注ぎ、太郎に渡してくれました。

「広い庭だろう」

「うん」

「昔ここに、いろんな木があった。桃に椿、もみじの林、じんちようげにきんもくせい、ぎんもくせい。玄関前にはさるすべりがあった」

「それって」

「ああ、お皿に映っていた庭がそうだよ。うちの庭だ」

太郎はびっくりして、お茶のカップを落としそうになりました。本当にあのすてきな庭が、目の前の庭なのでしょうか。

「この家は昔から農家だったけれど、野菜の

畑以外に薬草を作っていたんだ。薬屋さんに売ったりしていたらしい」

太郎が初めて聞く話です。でもわかりました、あの畑の香は、薬草のにおいだったので。

「私は、この家におむこさんに来たんだ」

「それは、知ってる」

「この家に来た時は、まだおばあちゃんのお父さんお母さん、お前のひいおじいちゃん達も元気だった。この庭は本当にきれいだった。それに何がすごいつて、季節ごとに花を咲かせる植物もすべて、薬になるということだった。おばあちゃんも庭が大好きで、よく手入れしていたよ」

パサパサと羽音がして、近くに鳥がおりてきました。畑に来る鳥は、すぐに追い払っていたおじいちゃんでしたが、今はのんびりと鳥を見えています。

「だけどその頃には、採れたものを薬屋に売ったりしていなかった。そんな時、大干ば

つがあつたんだよ。畑に作物は実らず、売  
るものどころか、自分達の食べ物すらない  
くらいだった」

おじいちゃんは、ふっとまゆを寄せました。

「その時にね、この庭に畑を作ろうと言っ  
たんだ。もう売れないもの、役に立たないも  
のを育てるより、自分たちのたべるものを  
植えようって」

「それで、この畑になったの」

「いや、その時はならなかった」

「じゃあ、いつ」

太郎が聞くと、おじいちゃんはさみしそう  
に笑いました。

「畑にしようと言った時、ひいおじいちゃん  
がすごく怒ったんだ。先祖代々、大事にし  
てきたこの薬草園をつぶすのか、ってね」

「薬草園」

「ああ、薬草園ってよんでいたんだ」

それは初めて聞く言葉でしたが、太郎の耳  
に心地よく響きました。

「少しでも食べるものがあれば、みんな楽になるって思ったんだ。それからひいおじいちゃんもおばあちゃんも、ろくに口をきいてくれなくなっちゃった」

「そんな」

「私ももつと、別の言い方をすればよかったかも知れないがね」

さつきの鳥が、ぴーっと鳴いて飛んで行き  
ました。

「私はこの家で一人になった。おばあちゃんも、結局はひいおじいちゃん達の言うことを聞くしかなかったんだ。あの時はつらかった。本当につらくて、逃げだそうかと思  
ったくらい」

がんこなおじいちゃんが、そんなにもつらい  
思いをしていたということが、ちよつと信じられ  
ません。それでも言葉に、苦いものが混じって  
いて、太郎を悲しくさせました。

「ひいおじいちゃん達がいなくなっただけ、  
私は薬草園を畑に変えた。もうこんな庭は

みたくなかったと思って、かげも形もないくらい、木や草を全部ひっこぬいて耕したんだ。金魚の泳いでいた池もつぶした」

太郎は小さく息をつきました。あの池は、どこいら辺りにあったのでしよう。庭の真ん中辺り、今トマトの畑があるところでしょうか。

「おばあちゃんは、何も言わなかった。ただ悲しそうな顔をして、じっと見ていた」

おじいちゃんは、太郎に顔を向けました。

「ひどいおじいちゃんだろう」

「……」

太郎はぐっと、言葉につまりました。おばあちゃんの悲しむ顔が見えるようでしたが、おじいちゃんもずっと、つらい目にあってきたのです。

「そんなこと、ないと思う」

つぶやくような返事に、おじいちゃんは小さく笑いました。

「無理するな」

「してないよ」

おじいちゃんはぽんぽんと、太郎の頭を優しくなでました。

「この間、ここに赤松を植えようと思って掘ったら、お皿が出てきた。シャベルで掘っていたのに、割れないできれいに出てきたんだ。どこかで見ることがあるな、と考えていたら、おばあちゃんのお皿だったことを思い出したんだ」

「どうしてうめられていたの」

「おばあちゃんのお皿って言っても、ごはんを食べるようなお皿じゃない。つんだ薬草を入れておくお皿だった。おばあちゃんはいつも、このお皿を持って畑にいた」

その時、太郎はふと思いついたことがありました。

「おじいちゃん、あのお皿の女の子って」

おじいちゃんは、ふふふと笑いました。

「そうだよ、おばあちゃんだ。私がこの家に来る前のおばあちゃんだけれど、間違いな

い」

「そうだったんだ……」

「畑にする時、いろいろ道具も処分したんだ。

でもおばあちゃんは、お皿が捨てられるのを見たくなかったんだろう。布に包んでここにうめたんだろうな」

畑で楽しそうに働く少女を思い出し、太郎は何とも言えない気持ちになりました。

「ああ、おばあちゃんのお皿だと思って、洗ってみがいてみたら、庭が見えたんだ」

おじいちゃんは、ぽつりと言いました。

「おばあちゃんが、庭を返せと言ってるような気がしたよ」

「そんな」

「でも、庭を見ていたら、何だかとてもなつかしい気持ちになったんだ。おかしな話だよ。見るのもいやな庭だったのに、薬草のにおいまでなつかしい」

「それで、いろんな木を植えたの」

「年をとって、ひいおじいちゃんの気持ちも、

少しはわかるようになったんだな。罪滅ぼしの意味もこめてね。同じようにはできないけれど、少しでもあの庭に戻りたいと思っ

おじいちゃんは、少しづつ整えられていく庭を、まっすぐ見つめました。

「おばあちゃん、喜んでるね」

「そうだといいいけどな」

おじいちゃんは立ち上がると、おしりをばんぱんとはたきました。

「畑のとなりにリュウノウギクを植えるよ。」

おばあちゃんの好きだった花だ。いい香がする」

「ぼくも手伝うよ」

太郎の言葉に、おじいちゃんはっこりしました。

太郎が、庭の少女と同じ年くらいになる頃には、庭にはたくさんの木が植わり、花を咲かせました。池は造ることができませんでし

たが、池をかたちどった周りに、あやめを植えています。

おじいちゃんは、腰が痛い、どこが痛いと言うようになりましたが、毎日元気に庭に出ています。

「おばあちゃんが、庭を返せと言ってるような気がしたよ」

おじいちゃんはそう言っていました。太郎はちがう気がしていました。

この薬草園の植物は、おじいちゃんの体にとてもよく効いたのです。

あの皿はおばあちゃんからの、贈り物だったかも知れません。